

# 清流

題字：芳野 充

令和元年11月30日  
第35号

発行所 加来不動産(株)  
発行者 加来 寛  
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに  
静かに  
清流のように

## 気づいたら機敏にうごく

「謙虚さがなくなる兆候」の8番目には、「物事の対応が緩慢になる」とあります。「緩慢」という意味を調べてみると、「1. 動作がゆっくりしていて、のろいこと。」「2. 物事の処理のしかたが手ぬるいこと」とありました。

わたしの過去の失敗談をほり返すと、溢れんばかりに出てきます。以前はお客さまから、このようなお叱りをいただくことがありました。例えば、「なぜ、連絡の一本もよこせないのか!」というもの。当時のわたしをふり返ると、その理由は、「忙しい」という思い込みが強かった。「あとで連絡しよう」という思いが、ズルズルと伸びてしまっていた。単純にわすれてしまう、ということが多くありました。つまり裏を返せば、お客さま本意ではなく、自分本位のワガママを先行させ、まさに「物事の処理のしかたが手ぬるい」対応だったわけですね。

またその頃、家内からもよく注意を受けておりました。「使わない部屋の電気がつけっぱなし」、「たんだ洗たく物は、はやくしまつて」、「脱いだ服はすぐに洗たくかごに入れて」など、あげればキリがありません。そのときのわたしの思いは、「気づいたのなら、やってくれてもいいのに」、「そのうちやろうと思っていた」など、やはりワガママで謙虚さのない思いでした。

素心学塾塾長の池田繁美先生から、「機敏さ」ということを教えていただきました。「機敏さ」とは、相手のことを思いやらなければ身につかない。またこうすれば相手が喜ぶだろう、こすれば相手が安心するだろう、という思いが行動を素早くさせる、ということですね。

この「機敏さ」は、現在でもわたしが家庭で気をつけていることです。使わない部屋の電気はすぐ消す、たたくでくれた洗たくものはすぐにしまつ、脱いだ服はすぐに洗たくかごに入れる、また、毎朝寝室の布団をたたむ、落ちているゴミに気づいたらすぐに掃除機をかける、などです。

このようなことに気づいても、緩慢な対応をして先送りするとき、わたしは謙虚さがなくなっている状態かもしれない、と自分を客観視するようにしています。気づいたら機敏にうごく。このことが、周りに安心を与え、またわたしが謙虚さを失っていないか、のバロメーターとなっています。

加来 寛

